

浅草喜劇人銘々伝

5

西条 昇

江戸川大学教授・喜劇史研究家

田谷力三篇

〈われ等がテナー〉と人々に言われ、ペラゴロたちを熱狂させた田谷力三は大正7年から同12年まで浅草オペラ全盛期を代表する大スターであった。一方で、昭和に入ってから終戦直前までレビュー喜劇の劇団の座長、もしくは幹部として過ごした時期のほうが長かったことも確かなのである。

明治32年1月13日、東京は神田の生まれ、10歳の時に観た「三越少年音楽隊」に入り、大正6年に18歳で加入した赤坂・ローヤル館で帝歌劇部の指導者だったイタリア人のジョヴァンニ・ヴィットリオ・ローシーにテナー歌手としての才能を認められる。翌7年3月に「原信子歌劇団」に加わって浅草・観音劇場に出演。同年中に「七声歌劇団」に移ると浅草・金龍館で公演を重ねた。同8年5月に松竹の「新星歌舞劇団」に引き抜かれるが、翌9年9月に根岸興行部が田谷を含めた主要幹部全員を引き抜き、金龍館で「根岸大歌劇団」を旗揚げする。ここから同12年9月1日の関東大震災で浅草六区が壊滅的な被害を受けるまで浅草オ

ペラは根岸大歌劇団一強の時代が続いた。もともと浅草オペラを支持した観客たちは本格的なグラインド・オペラよりも笑いの要素も含んだ〈喜歌劇〉や〈ポードビル〉を好む傾向があり、当時のプログラムには〈喜劇〉〈ミュージカルコメデー〉と銘打った出し物も見られる。田谷の持ち歌である『ベアトリ姐ちゃん』や『コロッケのうた』もコミカルな要素が強い。

震災後の田谷は「森歌劇団」に参加するが、以前ほど観客が集まらず、大正14年10月の浅草劇場『オペラの怪人』を最後に浅草オペラは六区から消滅する。

時代は昭和に変わってジャズソングやレビューが流行の兆しを見せると、同じ根岸大歌劇団に居た二村定一はジャズソングのヒット曲を連発して流行歌手となり、同歌劇団のコーラスボーイだったエノケンこと榎本健一は昭和4年に参加したレビュー劇団「カジノ・フォーリー」で頭角を現し、〈喜劇王〉への道を歩み始めていた。

六区にレビュー喜劇の劇団が増え始める昭和5年には浅草・電気館で映画のアトラクションとして結成された「パラマウントショウ」に参加し、6月に大歌劇『カヴァレリア・ルスチカナ(ルスチカーナ)』を上演。翌6年に加入した「金竜レビュー劇場」の第2回公演では「カルメン」が上演された。とは言え、浅草オペラの演目は既に集客の目玉にはならず、どちらの劇団も短期間で解散となった。

昭和7年10月に浅草・オペラ館でレビュー喜劇の劇団「ヤパン・モカル」が旗揚げされると田谷は12月末の第9回公演から同11年の春頃まで3年以上も座長を務めた。同年6月には金龍館で「松竹フォーリー(フォーリー)」田谷力三一座」を結成。どちらの劇団でも1回で4本程度の出物のうち、田谷は〈ヴァラエティ〉での独唱と〈音楽喜劇〉の主役を務めることが多く、観客を笑わせる役どころは川公一や田谷の弟子の〈ガマガチ〉こと高屋朗あたりが担っていた。

昭和13年頃からは浅草・常盤座での「笑の王国」に幹部として定着。ここで喜劇の中で笑わせたのは関時男や横尾泥海男らであった。同18年1月からは浅草・江川劇場での「国民喜劇座 関時男一座」に加盟出演している。

戦後は昭和26年2月に浅草花月劇場での喜歌劇『ボッカチオ』に出演後、

大歌劇

われ等がテナー 久方振りの浅草出陣

カヴァレリア・ルスチカナ

御好評 淡谷のり子の独唱 數番!

★パラマウント公演 愈々白熱光彩 等のわれ 田谷へて 歓喜の炬火 あり!

田谷が得意中の得意 カヴァレリア・ルスチカナの一幕を携へての浅草出陣に御期待あれ

ソプラノ 鈴木今子
アルト 勝田あづ子
バリトン 北 雄二
出 演

來週公演 電氣館

田谷力三が昭和5年6月頃に出演した浅草・電気館でのパラマウントショウ『カヴァレリア・ルスチカナ(ルスチカーナ)』のチラシ。〈われ等がテナー 久方振りの浅草出陣〉との惹句が目立つ。浅草オペラ全盛期は大正12年9月の関東大震災で終わり、すでに浅草レビューの時代が始まっていた。(筆者提供)

西条昇の浅草喜劇コレクション

田谷力三篇

西条昇の所蔵資料の一部を本文ページ (P12-13) と併せてお楽しみ下さい。



大正7年の浅草・観音劇場での原信子歌劇団『靴直しクリスピノ』のイラストと楽譜の絵葉書。上段のイラスト左端に「田谷のコンテイノ」が描かれている。



松竹演藝部が「笑の王国」の姉妹劇団として昭和11年6月末に浅草・金龍館で旗揚げした「松竹フオーリー(フオーリー)田谷力三一座」の第2回公演(左)と第3回公演(右)のプログラム。田谷の他に川公一、佐藤久雄、小宮凡人、田谷の弟子の高屋朗といった喜劇人が出演。



田谷が座長として昭和7年12月末に加入した浅草・オペラ館でのレヴュー劇団「ヤパン・モカル」の第9回公演のプログラム。



浅草・常盤座での「笑の王国」の昭和16年新春興行のプログラム。田谷(写真右側の上から3人め)は同13年頃から同劇団に在籍していた。



田谷が加盟出演していた浅草・江川劇場での「国民喜劇座 関時男一座」第20回公演(昭和18年7月)のプログラム。写真右側の一番上が田谷である。

西条 昇 江戸川大学教授、喜劇史研究者。

昭和39年、東京・飯田橋生まれ。幼少期より浅草をはじめとする都内の劇場や寄席で喜劇と演芸を観て育つ。新聞・雑誌への連載やTV・ラジオ出演も多数。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』『笑伝・三波伸介』など。

